

長岡京左京一条四坊十二町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一六

長岡京左京一条四坊十二町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京左京一条四坊十二町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび工場新築工事に伴う長岡京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

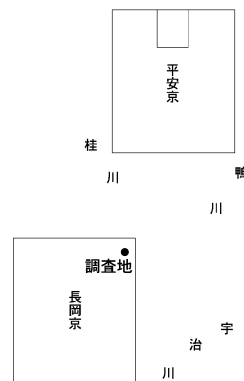
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 11 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京左京一条四坊十二町跡
長岡京左京第 515 次調査 (7AN-WSA2)
- 2 調査所在地 京都市伏見区久我本町 11-36、11-287
- 3 委 託 者 株式会社ユーシン精機 代表取締役社長 小谷眞由美
- 4 調査期間 2006 年 9 月 7 日～ 2006 年 9 月 20 日
- 5 調査面積 約 70 m²
- 6 調査担当者 丸川義広
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500)「久世」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点 (一級基準点) を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・丸川義広
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 丸川義広
- 18 編集・調整 児玉光世・近藤章子・山口 眞
- 19 周辺の調査成果については、堀 大輔氏 (京都市文化市民局文化部文化財保護課) より資料を提供していただいた。記して感謝いたします。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査経過	1
(2) 環境・周辺の調査	2
2. 遺 構	4
(1) 層 序	4
(2) 遺 構	7
3. 遺 物	8
4. ま と め	9

図 版 目 次

図版1	遺構	全景（北から）
図版2	遺構・遺物	1 C－C'断面（北から） 2 出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	調査前全景（北から）	3
図4	作業風景（北から）	3
図5	調査区断面図（1：80）	5
図6	調査区実測図（1：150）	6
図7	出土土器拓影・実測図（1：4）	8
図8	周辺調査位置図（1：4,000）	9

表 目 次

表 1	遺構概要表	4
表 2	遺物概要表	7

長岡京左京一条四坊十二町跡

1. 調査経過

(1) 調査経過

調査地は長岡京の北東隅部、左京一条四坊十二町に推定される。当該地において工場の新築工事が計画されたため、2006年8月下旬に京都市文化市民局文化財保護課が試掘調査を実施したところ、遺構が残存することが確認され、発掘調査を実施することとなった。調査範囲は、文化財保護課の指導によって新築工場の位置で遺構の残存が良好な、幅3m、長さ23mの南北に細長い範囲となった。

調査地周辺では現代盛土が厚く堆積する。試掘調査によると、長岡京期の遺構面は北端で約1.5m、中央部で約1.7m、南端で約1.4m下と判明していた。発掘調査では、長岡京期の遺構面を調査対象とした。

調査地の長岡京内での位置は、左京一条四坊十二町の中央北西寄りと想定された。そのため、

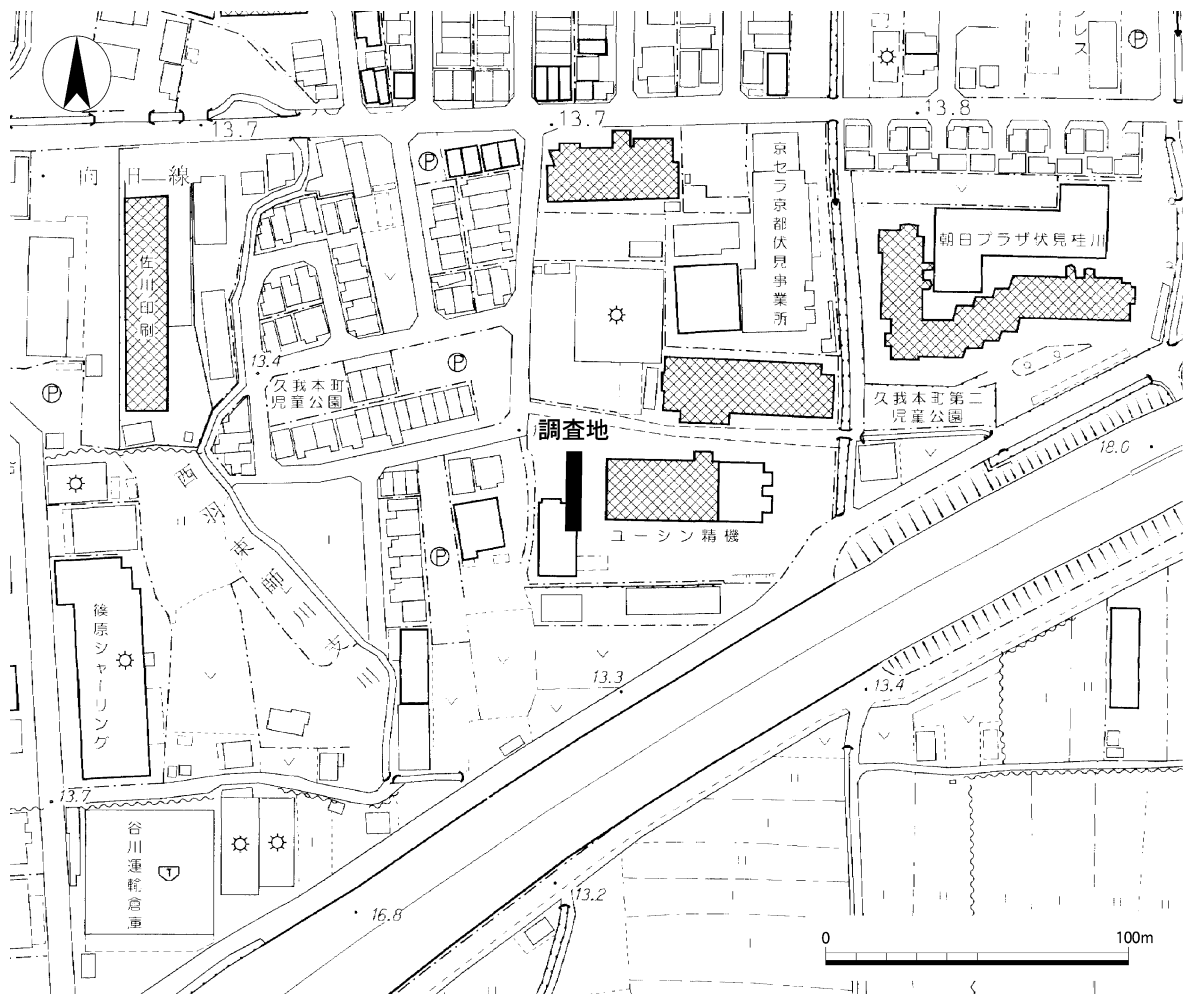


図1 調査位置図 (1 : 2,500)

条坊に関する遺構よりも宅地内における建物遺構の検出を主目的とした。この他、試掘調査では瓦器や須恵器が出土しており、中世遺構の存在も想定できた。また周辺では、弥生時代から古墳時代の遺構、ならびに河川や流路などの自然地形に伴う遺構も検出されており、それらの確認も調査目的とした。

調査は2006年9月7日から開始した。重機掘削では現地表下1.5mで長岡京期とみられる遺構面を検出した。遺構検出したところ、北端から南西方向に蛇行する流路状の遺構を検出し、これを「流路1」とした。遺構の規模は不明確であり、上面を約0.3mほど掘り下げた状態で、9月14日に全景写真を撮影した。以後、平面図・断面図を作成し、断ち割りを行って断面図を補足し、9月19日に主要な作業を終了した。9月20日には埋め戻しを実施し、同日、機材類と備品を撤去し、すべての現場作業を終了した。

(2) 環境・周辺の調査

調査地は標高13.5m程度の平坦地で、地形分類では「氾濫原」に分類される。周囲では、旧河道と自然堤防が分布する。調査地の西方約80mには北西から南東方向の流路があり、図1上では「西羽束師川支流」と表記される。現在の西羽束師川は、条里地割に従って大部分が東西・南北方向に流下するが、かつては地形の傾斜に従って北西から南東方向に流下していたものと推定でき、

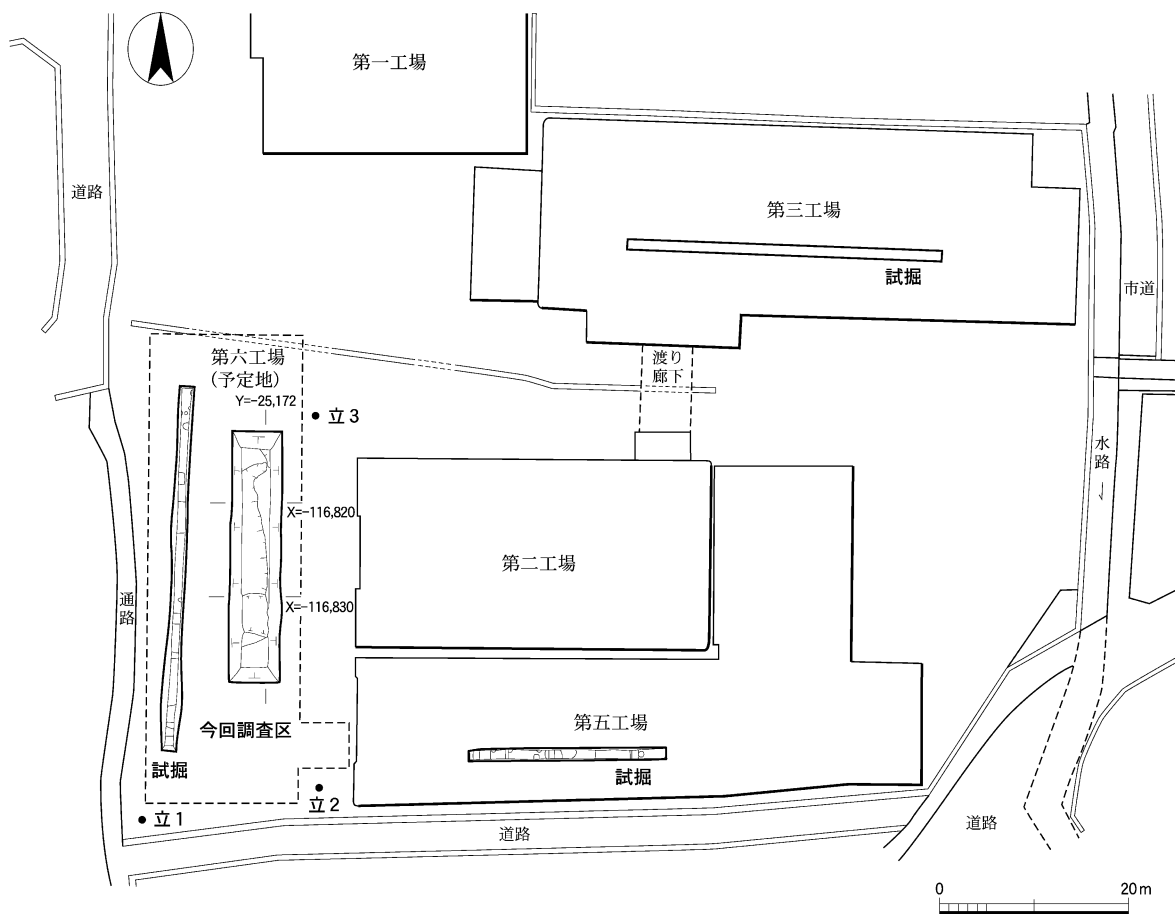


図2 調査区配置図 (1:800)



図3 調査前全景（北から）



図4 作業風景（北から）

地割りの乱れは旧流路の痕跡を示すと理解されている。

調査地周辺での調査事例は乏しい。東側のマンション建設に伴う調査では、掘立柱建物、柵、溝などが検出されており、長岡京期には宅地班給が実施されていたことが判明している¹⁾。この調査地は、自然堤防状の高まりであったため、宅地が班給される対象となったのであろう。

西側の住宅地では広域下水道工事に伴う立会調査が実施され、弥生時代の沼、ないし流路が検出されている²⁾。遺構の方向は北西から南東方向とされるが、今回の調査でも流路遺構を検出しており、関連性が注目される。

当工場敷地内においては、第三工場・第五工場の新設に伴う試掘調査が実施されている³⁾。前者では遺構・遺物は検出されなかったが、後者においては長岡京期の柱穴と弥生時代の遺物包含層が確認されている。また調査終了後の2006年10月には、掘削工事に伴う立会調査が3箇所で行われた⁴⁾（図2の立1・立2・立3）。このうち、「立2」としたものは現地表下1.7 mまで掘削し、1.3 mで灰オリーブ色砂泥（図5の6層に相当）、1.4 mで黄褐色砂泥（同13層に相当）を検出し、調査地と同じ層序が一带にも広がることを確認できた。

註

- 1) 北田栄造「長岡京左京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 2) 長宗繁一「長岡京左京一条・南一条四坊、東土川遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 3) 第三工場の調査成果は『京都市内遺跡試掘調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1997年 P37、第五工場は『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2004年 P40による。調査の精細については、京都市文化市民局文化財保護課の堀 大輔氏よりご教示いただいた。
- 4) 調査は当研究所の吉本健吾が担当した。報告は『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』（平成19年3月に刊行）に掲載予定。

2. 遺 構

(1) 層 序

現代盛土層は、北端で 1.0 m、南端で 1.35 m と厚く堆積する。現代盛土層の下は、旧耕土・旧床土などの土層が厚さ約 0.5 m 堆積する（図 5 の 2～5）。これらは水田耕作に伴う土層で、繰り返し耕作された経過を示す。現地表から（5）層底部までの深さは 1.5 m ほどとなる。暗灰黄色泥土～粘土（6）は厚さ 0.3 m あり、マンガンの凝固した状態から 2～3 層に分層できる。この層には長岡京期の土師器・須恵器・瓦が包含される。今回遺構面としたものは、にぶい黄褐色粘土（7）上面である。

調査区の西壁は流路 1 の内部にあたり、その堆積層が観察できる。流路 1 では、灰色粘土（8）、灰色粘土（9）、灰オリーブ色粘土（10）、黒褐色腐植土（11）が堆積する。（8）～（11）層間の厚さは、0.6～0.8 m である。（11）層は木材・木の葉が未分解の状態に堆積した腐植土である。長く滞水状態であったため、木質分が保存されたとみられる。ただし、この（11）層は、北寄りの X=-116,819 以北では黄褐色泥土～粘土（13）、灰色粘土（14）の下に潜り込んでいる。このことは、（13）・（14）層は流路 1 内部の堆積層であり、（8）・（9）層が流路上半に堆積した頃には、北肩として存在していたことを示している。

遺構面とした（7）層は、X=-116,834 以南にはみられない。X=-116,834 以南では、（6）層以下に、にぶい黄褐色粘土（17）、にぶい黄褐色泥土～粘土（18）が堆積する。（18）層は堅く締まった土層で、マンガンが多く凝固するため、微高地状の高まりを形成していた土層と思われる。西壁断面でみると、流路 1 の堆積層である黒褐色腐植土（11）は X=-116,832 付近で立ち上がっており、この（18）層が流路 1 の南東肩を形成していたことがわかる。

北壁では、（6）層以下で東側に傾斜する堆積がみられた。傾斜の上半部に堆積した（7）・（9）層は、流路 1 内の（7）・（9）層と同一層と判断できた。また、底部付近に黒褐色腐植土（21）が堆積することも、流路 1 の堆積層序と類似していた。しかし、（21）層は（13）層の上に堆積しており、流路 1 の（11）層が（13）層下に潜り込む状況とは相違していた。さらに、（21）層の西肩上部には灰黄褐色粘土（20）も堆積しており、（21）層とした腐植土は、（13）層の堆積以後に形成された、流路 1 の（11）とは別の落ち込み状遺構に堆積した腐植土とみるのが良いと思われ、これを「流路 2」とした。

この（21）層と（11）層の下に堆積した灰色粘土（12）は、明るい灰色を呈する土層で遺物の出土も確認していない。流路 1・流路 2 の底部を形成しており、調査地近辺での無遺物層に相当

表 1 遺構概要表

時 期	遺 構	備 考
弥生時代末期 ～古墳時代初頭	流路 1・流路 2	全体が大規模な遺構の可能性もある

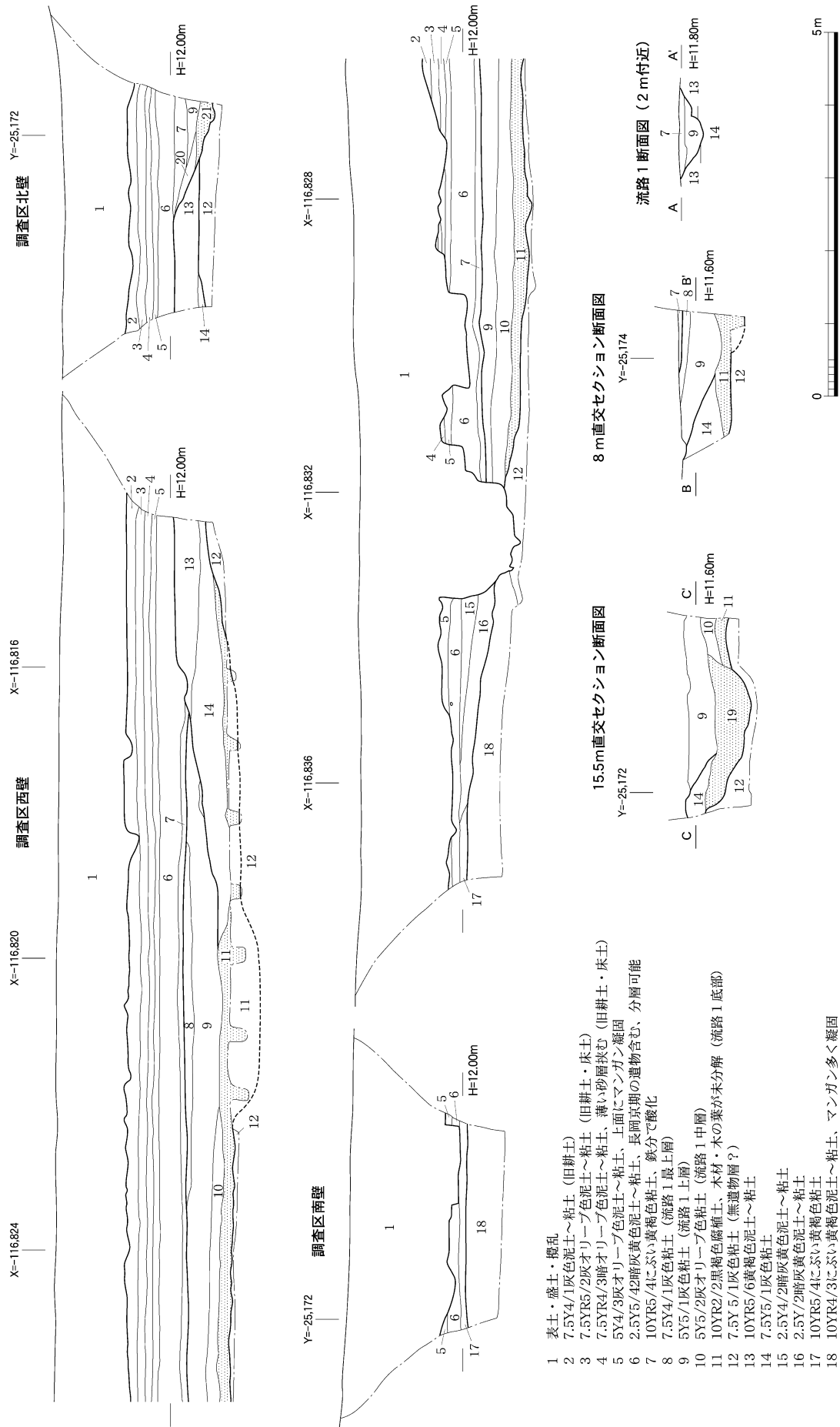


図5 調査区断面図 (1:80)

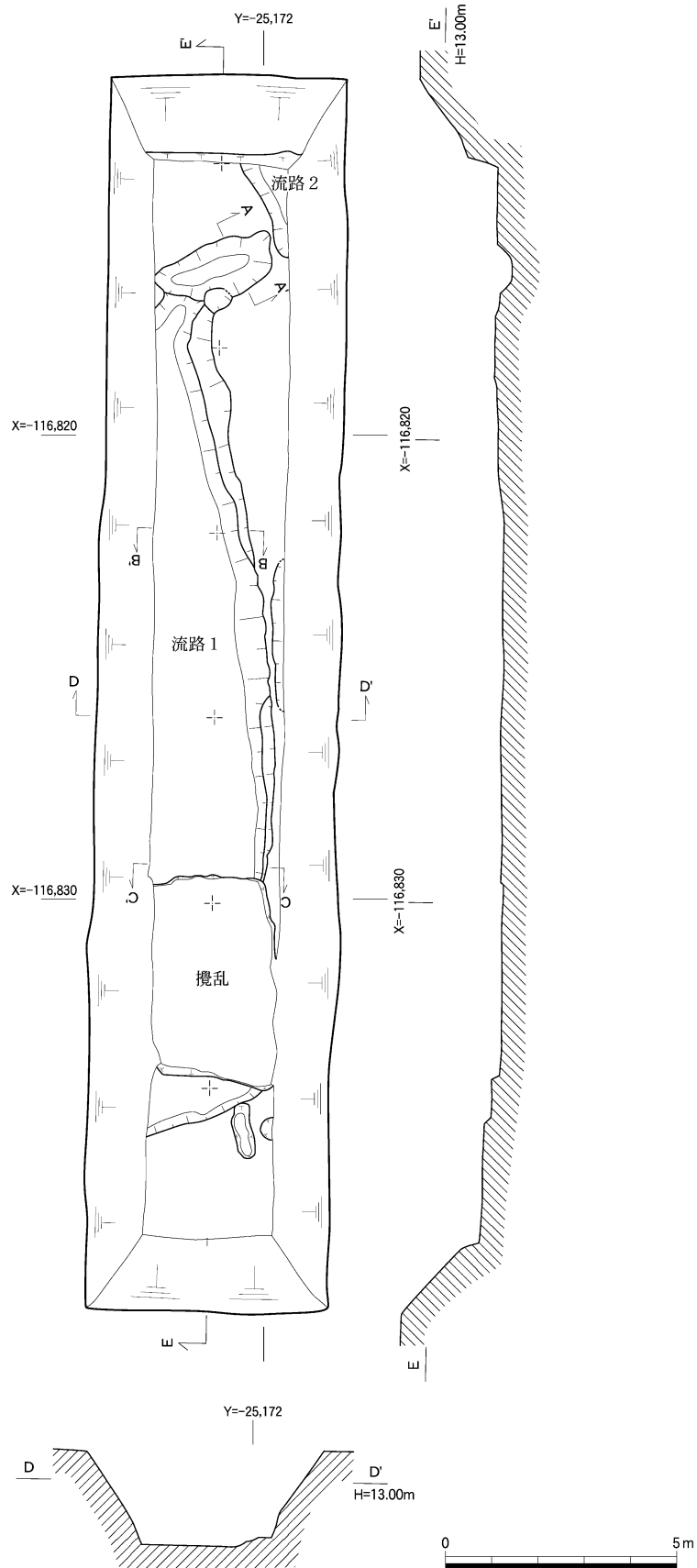


图6 調査区実測図 (1 : 150)

すると考えられる。

(2) 遺 構

検出遺構には、流路1と流路2がある。流路1は、出土遺物から弥生時代に属すると推定できた。流路2からは遺物が出土していないが、堆積層の(7)・(9)層は流路1と同一層と推定できたため、所属時期も同じであったとみられる。

流路1は、調査区内の北端で立ち上がりを検出した。図6は、流路内を約0.3m掘り下げた状態で作成したものである。この状態での北肩・東肩は、断面図の(13)層と(14)層にあたるが、断割りを実施した結果、さらに下層には黒褐色腐植土(11)が堆積することが判明し、(13)層と(14)層は一時的な肩であることが明らかとなった。

流路1の規模は、西壁での(11)層を基準に復元すると南北長約18.5mある。幅と深さは、A-A'断面で1.2m・0.3m、C-C'断面で2.0m・0.85mとなる。しかしB-B'断面では腐植土の立ち上がりが検出できず、幅は不明である。またC-C'断面では(11)層の腐植土とは別の黒褐色腐植土(19)がみられたが、この腐植土は(11)層以後に堆積したことが断面観察で判明した。

流路1の南端は確認できていない。西壁でみると、(11)層はX=-116,832付近で立ち上がるため、南西側にカーブして調査区外に流出していたと判断できる。なお、この流路1については、さらに大規模な遺構の一部を調査した可能性もあるが、調査範囲の制約上それ以上の資料は得られていない。

流路2は、調査区北東隅で検出した東側に落ち込む遺構である。現状で、幅1m以上、深さ0.5m以上ある。先述したように、底部に堆積する腐植土(21)は流路1の腐植土(11)より層位的には上部に位置する。流路1の上半部が堆積した頃、この流路2も堆積したとみるのが妥当と思われる。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器	2箱	弥生土器2点	1箱	0箱
古墳時代	須恵器		須恵器2点		
長岡京期	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類		土師器2点、須恵器4点		
中 世	瓦器				
合 計		2箱	10点(1箱)	1箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱増加した。

3. 遺物

遺物の出土量は少なく、収納コンテナ1箱分にとどまった。内容は、土器・瓦類のみである。時期的には弥生土器から中世に属するものまでであるが、長岡京期の遺物が約半数を占め、それ以外遺物は極めて少量である。

弥生土器としては、壺の破片が1片出土している（図7の1）。4本1組の櫛描直線文が2条認められ、個体の特徴から判断して口頸部の破片とみられる。弥生時代中期に属する。北壁（13）層から出土した。

（2）も弥生土器とみられる破片で、壺の肩部と推定される。体部と口頸部の境界には角度があり、口頸部は強く外反していたとみられる。文様は施されておらず、詳細な時期決定はできないが、弥生時代中期から後期前半までにおさまると推定される。流路1埋土（9層）から出土した。

（3）は須恵器甕の口頸部で、外面には突帯と波状文が組み合わさって施されている。波状文は突帯に食い込んでいる。焼成良好であるが内面は赤紫色を呈する。古墳時代中期（5世紀）の製品とみられる。重機掘削時に出土した。古墳時代に属するとみられる須恵器では、この他に甕の体部片があり、内面に叩きの痕跡を擦り消したものが含まれる。

古墳時代後期（6世紀）に属するものとしては、須恵器の杯蓋が1点ある（図版2の9）。天井部にはヘラケズリが施される。流路1を覆う（6）層から出土した。

長岡京期の遺物では、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕、緑釉陶器壺、軒平瓦、平瓦などがあり、図7では（4～8）として図示した。いずれも流路1を覆う（6）層から出土した。

（4）は土師器碗で、口径11.3 cm、器高3.3 cmある。器表は磨滅しており調整は観察できないが、外面はヘラケズリであったと思われる。口縁端部に煤が付着する。（5）は土師器甕の口縁部で、口径22 cm。外反する口縁部をもつ。体部は出土していない。（6）～（8）は高台をもつ須恵器杯である。高台径は（6）が8.5 cm、（7）が10 cm、（8）が12.5 cmである。この杯に組み合う蓋は、つまみの部分が1点出土している（図版2の10）。

中世に属する遺物としては瓦器碗の小片が1点出土しているが、図示し得ない。

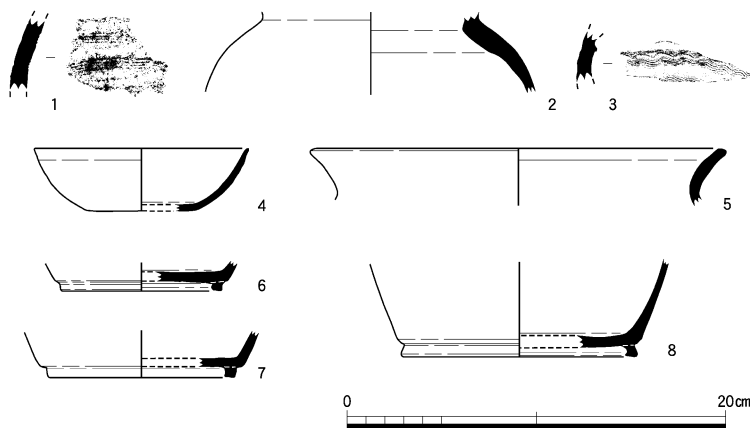


図7 出土土器拓影・実測図（1：4）

4. まとめ

主要遺構として南北方向の流路1を検出した。しかし、調査範囲が狭いこともあって、遺構の規模・性格は十分把握できなかった。流路1は、出土遺物から弥生時代中期から後期に埋没したと判断できた。流路1の底部には黒褐色腐植土(図5の11層)が堆積していたが、この層から遺物は出土していない。(11)層は、(13)・(14)層の下に潜り込んでいたが、(13)層からは櫛描文をもつ弥生時代中期の土器(図7の1)が出土し、(13)層の上に堆積した(9)層からも弥生時代中期から後期とみられる土器(図7の2)が出土したことから、流路1の所属年代を推定した。また、流路1内に堆積した腐植土には、(11)層以外に(19)層がみられた。(19)層は、C-C'断面で検出したもので、層位的には(11)層より後に堆積した層である。この他、流路2内にも腐植土(21層)があり、こちらも(11)層より新しいと判断できた。(19)層と(21)層の関係は直接比較できないが、(11)層が堆積して以降も流路1周辺では引き続き腐植土が堆積するような環境が存在したことを示すものであろう。

次に調査地周辺での調査事例についてみておく。東側のマンション建設に伴う調査(図8では「S63発掘」と表記)では、長岡京期の掘立柱建物・柵・溝などが検出されており、長岡京北東隅の整備状況を知る上でも貴重な成果が得られた¹⁾。また、この調査では、弥生時代の方形周溝墓状遺構も検出されており、自然堤防状の高まりが墓地や宅地に利用される状況が明らかとなった。

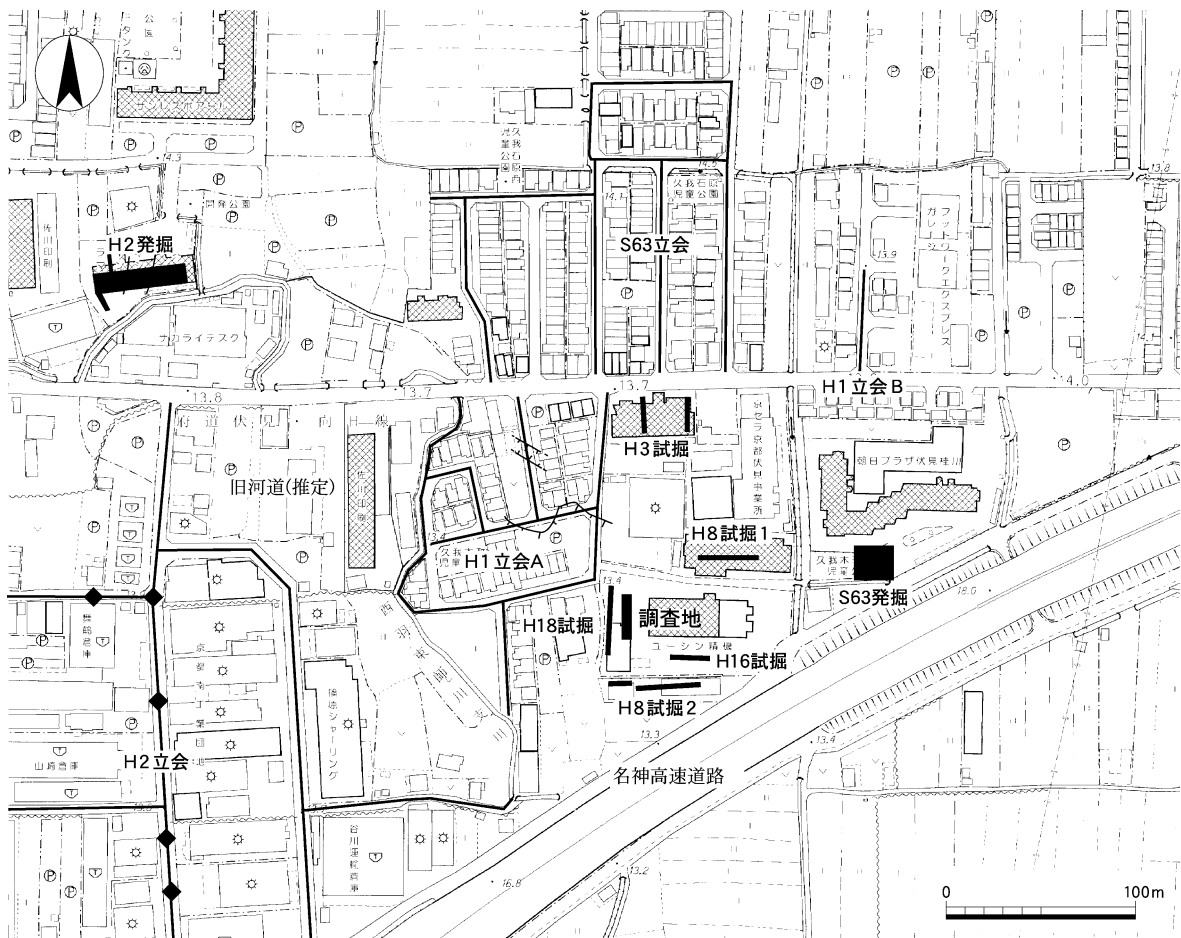


図8 周辺調査位置図(1:4,000) ※H2立会での■は竪穴住居検出地点

調査地の西側では、広域下水道工事に伴う立会調査（同「H 1 立会 A」）が実施され、南西側には弥生時代の沼、あるいは流路状遺構が広がる状況が明らかとなった²⁾。沼状の落ち込み、ならびに弥生土器の出土は、今回の調査地と共通するもので、関連性は高いといえる。なお、立会調査地の西側は、地割りの乱れから旧河道の存在が想定されてきたが、立会調査で検出した沼状遺構の肩は旧河道の北岸に相当する可能性も考えられる。そうすると、今回の調査地で検出した流路 1 は立会調査で判明した沼状遺構の延長部の可能性もあり、地形の観察から想定された旧河道の範囲以上に、湿地状の地形が及んでいたことを想定させる資料となった。

調査地の北側約 100 m で実施された試掘調査（「H 3 試掘」）では、現地表下 1.3 m 付近に時期不明の包含層があり、1.5 ～ 2.1 m で地山面となる³⁾。地山面の確認は、この付近が安定的な地盤であったことを示すものである。また、調査地の南隣で実施された試掘調査（「H 8 試掘 2」）では、現地表下 0.5 m で弥生時代の南北溝、土器溜、時期不明の溝数条が検出された⁴⁾。南北溝は幅約 3 m、深さ 0.7 m あり、底部には腐植土が堆積する。今回の調査地で検出した流路 1 との関連性が注意されるが、流路 1 は南西側に湾曲するため、同一遺構の可能性は低いと思われる。なお、当工場で実施された試掘調査（「H 8 試掘 1」と「H16 試掘」）については、第 1 章で解説したので詳細は省略するが、「H 8 試掘 1」においては安定した地盤を検出し、陸地側であったことがわかる。

H 3 試掘調査地の北側の住宅地においても立会調査が実施されている（「S63 立会」）。一帯の地山は黄褐色泥土で、これを掘り込む遺構や住居の可能性のある遺構、川の遺構などが検出されている⁵⁾。旧河道（推定）の南西側、京都南工業団地内で実施した立会調査（「H 2 立会」）では、安定した黄褐色泥土が分布し、弥生時代の竪穴住居跡を数棟検出したことから、東土川遺跡の実態が明らかとなった⁶⁾。遺跡の範囲は、東西 150 m × 南北 200 m に達すると推定され、旧河道はその東限となっていた。ここで地形と集落の関係が確認された意義は大きい。最後に、旧河道の北側で実施した発掘調査（「H 2 発掘」）では、掘立柱建物と流路が検出されている⁷⁾。流路は弥生時代から長岡京・平安時代までの遺物を含む。

以上、調査地周辺での調査事例を俯瞰してきた。結果、安定した地盤が検出された範囲は微高地を呈し、弥生時代では集落跡、長岡京期では宅地班給の対象地となり、周囲には湿地や流路が広がる環境が明瞭となった。また、調査地の西側に推定された旧河道は、H 1 立会 A と今回の調査成果から、河道の北東岸がさらに北方に及んでいたことも想定できた。このように、今回は狭い範囲の調査であったが、周辺の調査成果と照合することで、長岡京北東隅部の実態、ならびに遷都前の地形環境がより詳しく理解できるようになった点で意義深かったと思われる。

註

- 1) 北田栄造「長岡京左京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和 63 年度』京都市文化観光局 1989 年
- 2) 長宗繁一「長岡京左京一条・南一条四坊、東土川遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994 年

- 3) 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年 P63
- 4) 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年 P40
- 5) 長宗繁一「長岡京左京南一条坊・東土川遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 6) 長宗繁一「長岡京左京南一条四坊・東土川遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 7) 鈴木廣司「長岡京左京一条四坊・東土川遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうさきょういちじょうしぼうじゅうにちょうあと							
書名	長岡京左京一条四坊十二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-16							
編著者名	丸川義広							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうさきょう 長岡京左京 いちじょうしぼう 一条四坊 じゅうにちょうあと 十二町跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 こがほんまち 久我本町 11-36, 11-287	26100	401	34度 56分 48秒	135度 43分 28秒	2006年9月 7日～2006 年9月20日	約70m ²	工場新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京左京 一条四坊 十二町跡	都城跡	弥生時代	流路	弥生土器				
		古墳時代・ 長岡京期	遺物包含層	土師器、須恵器、緑釉 陶器、瓦類				
		鎌倉時代・ 室町時代	遺物包含層	瓦器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-16
長岡京左京一条四坊十二町跡

発行日 2006年11月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961